

年間第8主日 2014.3.1

空の鳥・野の花

マタイ福音書6章24-34節

6:24 「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

6:25 「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。

6:26 空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。

6:27 あなたがたのうちだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。

6:28 なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。

6:29 しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。

6:30 今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。

6:31 だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と云つて、思ひ悩むな。

6:32 それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。

6:33 何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのも

のはみな加えて与えられる。

6:34 だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

## 説教

つまらない教師はひたすらしゃべり続ける。

有能な教師はわかり易く説明する。

優れた教師は自らやってみせる。

偉大な教師は心に火を灯す。

(ウィリアム・アーサー・ウォード名言集から)

説教者にとっては耳の痛いことですが、ほんとうにその通りだと思います。

さて、きょうのテキストは「空の鳥、野の花」といわれ親しまれている、福音書の中でも屈指のうつくしい話です。「空の鳥・野の花」は何も喋りません。ただ、大空を舞い、野山を美しく飾っているだけです。わたしたちもよけいなおしゃべりはしないで福音を聴くことにしましょう。でもこれでおしまいというわけにもいかないのです、ちょっとだけ 19 世紀の哲学者キルケゴールの「沈黙の教師」という解釈を紹介します。

<沈黙・傾聴・服従・喜び>

「野の花、空の鳥は、わたしたちにとって『沈黙の教師』である。鳥も花も、言葉を話すことはない、しかし、そのゆえに、わたしたちに本当のことを教えてくれる最高の『沈黙の教師』なのである」

このようにデンマークの哲学者キルケゴールは『野の百合、空の鳥』という本の中で語りだします。

花は黙って待っている。『いつ春が来るのか』と花は性急に問いはしない。なぜなら、花はそれが適当な時に来ることを知っている。また、たとえ花が季節を定めたととしても、それは花自身にとって何の役にも立たぬことを知っているからである。花はまた言わない。

『一体、いつになったら雨が降るであろうか』とか、あるいは『一体、いつになったら天気になるであろうか』と。あるいは『今はもういやというほど長く雨が降った』とか、あるいは『もう暑さは沢山だ』と。花はまえもって、今年の夏はどうなるであろうか、長いか、短いか、あるいはどんなに乾燥するか、また湿潤であるか、と問いはしない。否、花は沈黙して待っている。このように花は単純である。しかし花は決して欺かれはしない。  
(「野の百合、空の鳥」から)

『野の百合、空の鳥』のなかで「黙って待っている」沈黙して待っている鳥の姿、花の姿から、神の声を聴こうとする態度を学び、その傾聴によっておこってくる「服従」、神に対する絶対の服従からくる、いまここにある、ここにいるという「喜び」を学べとキルケゴールはいいます、それはすなわち祈りの成就である、と。沈黙・傾聴・服従・喜び、単語だけならべるとこのようになります。直感的・詩的な理解という批判もあるでしょうが、空には鳥が飛び、丘には野の花が咲いていた、そんな光景のガリラヤの丘でイエスがみことばを説いたとき、イエスのことばをその時その場で聞いていた人々一人ひとりの心の中に火が灯ったことでしょう。

空の鳥や野の花は「心配ごと」とは無縁です。それは、今の一瞬一瞬を神さまの恵みを受けて羽ばたき、そして祝福されて咲いてているからです。他人を傷つける言葉、うんざりする言葉、どうどう巡りのやりとりもなく、他人から自分がどう思われているかという不安もありません。そのような鳥や花の姿こそ、神の愛の祝福を映し出しているのです。だからイエスは続いてこう述べます。

**明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。(33節)**

-----